

パン用小麦「ミナミノカオリ」の多収のための追肥法

「ミナミノカオリ」の多収のための追肥法として、分げつ肥の施用時期については、慣行の1月下旬よりやや遅い2月中旬頃(6葉期頃)に窒素成分で4kg/10a、穂肥として3月上旬に4kg/10a施用する。

農業研究センター農産園芸研究所作物研究室(担当者:春口真一)

研究のねらい

平成19年から、対象を「担い手」に限定した「品目横断的経営安定対策」が導入され、今後水田の高度利用を前提とした土地利用型作物の体系的な技術確立が必要となっている。パン用小麦は需要の高まりに伴い、今後作付拡大が見込まれているが、収量性がやや低いことが生産現場で問題となっている。そこで、タンパク質含有率を維持しつつ、穂数確保・収量を向上をねらいとした追肥法を確立する。

研究成果

パン用小麦「ミナミノカオリ」の多収のための追肥法として、

1. 分げつ肥を慣行の窒素成分2kg/10aから4kg/10aに増施すると穂数、1穂粒数の増加により収量は17~23%向上する(表1、図1、図2)。
2. 穂肥を慣行の窒素成分2kg/10aから4kg/10aに増施すると穂数、1穂粒数の増加により収量は27~30%向上する(表1、図1、図2)。
3. 分げつ肥、穂肥の両方を2kg/10aから4kg/10aに増施すると穂数、1穂粒数の増加により収量は35~49%向上する(表1、図1、図2)。
4. 分げつ肥を遅らせるほど、容積重は重くなる(図3)。また、それによる収量の低下はみられない(表1、図1)。

普及上の留意点

1. 試験は2007年11月28日播種、播種量は5kg/10aで行った。
2. タンパク質含有率を維持する為には、分げつ肥と穂肥の増施効果がないため、穂揃い期頃に窒素成分で2kg/10aの追肥を行う。
3. 本試験は黒ボク土壌(可給態窒素量が6mg程度/乾土100g)のほ場において行った。

【具体的データ】

No.389 (平成21年9月) 分類コード02 -02 熊本県農林水産部

表1 生育、収量調査

分けつ肥 葉齢	追肥 体系	穂数 (本/m ²)	一穂 粒数 (粒)	m ² 当り 粒数 (*100粒)	精麦重 (kg/a)	収量 比	容積重 (g/L)	検査 等級 (1-7)
(分けつ肥-穂肥)								
4L (1/19)	2-2	420	30.5	128	47.3	107	834	4.0
	2-4	460	29.4	135	58.3	132	841	5.0
	4-2	471	29.2	138	54.2	122	829	4.5
	4-4	507	33.5	170	59.9	135	839	5.0
5L (2/4)	(慣行)2-2	366	30.3	111	44.3	(100)	837	5.0
	2-4	510	30.6	156	56.3	127	836	4.0
	4-2	461	31.2	144	54.4	123	837	4.0
	4-4	504	31.4	159	63.8	144	838	4.5
6L (2/19)	2-2	418	25.1	105	48.1	109	837	3.0
	2-4	486	31.3	152	57.7	130	843	3.5
	4-2	460	28.8	132	52.0	117	835	6.0
	4-4	549	32.6	179	66.2	149	839	5.5
7L (2/29)	2-2	403	28.6	115	46.2	104	841	4.0
	2-4	473	29.2	138	56.8	128	840	5.0
	4-2	490	29.9	146	58.6	132	838	5.0
	4-4	510	30.6	156	60.7	137	841	6.0

注) 基肥は窒素成分で5kg/10a、穂肥は3月7日に、穂揃い期追肥は4月19日に2kg/10a施用した。
全試験区の出穂期は4月13~14日、成熟期は6月4日、倒伏はみられなかった。
検査等級は1(1等上)~6(2等下)~7(規格外)とした

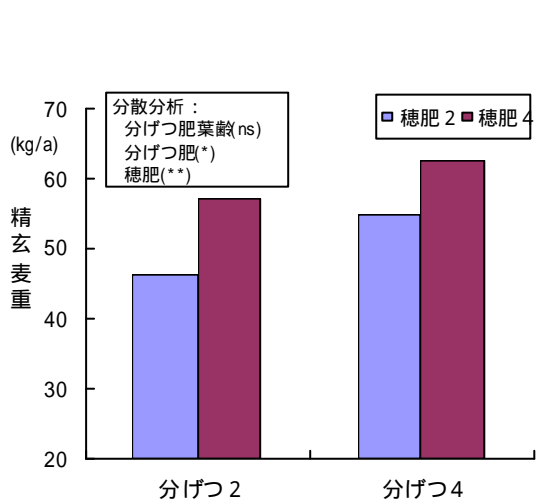


図1 追肥処理と収量

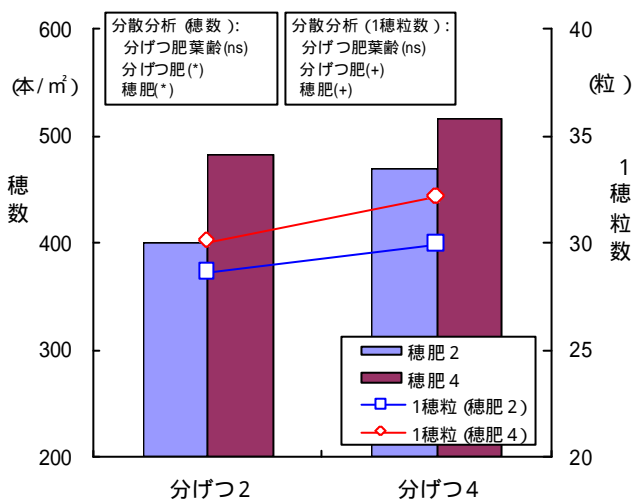


図2 追肥処理と穂数及び1穂粒数

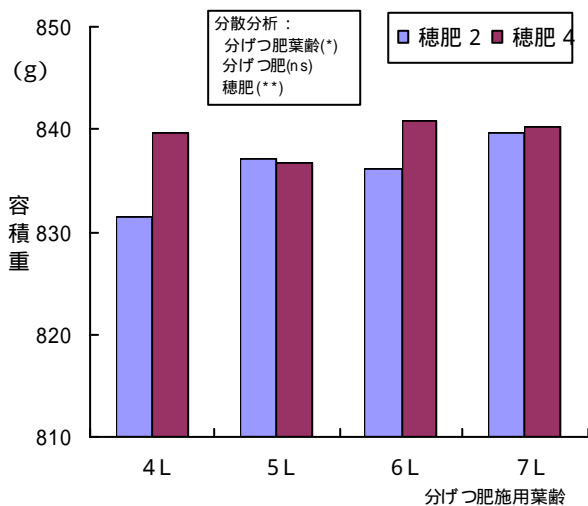


図3 追肥処理と容積重

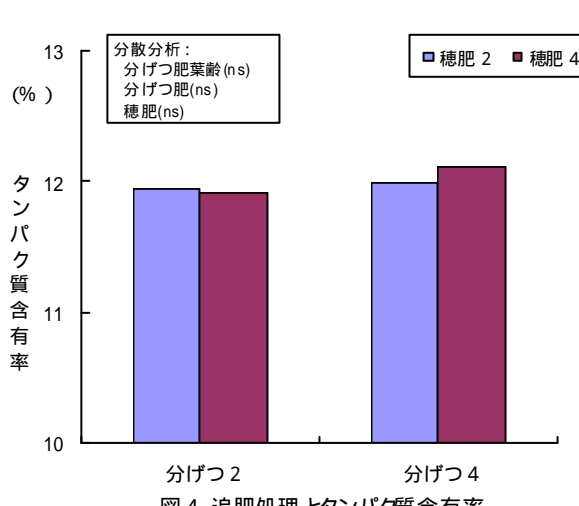


図4 追肥処理とタンパク質含有率